—論文—

福島県訓令による会津地方の『郷土誌』に関する研究（第1報）
——福島県昭和村の『郷土誌』を事例として——

後藤麻衣子　　田畑　久夫

A study of the Kyodoshi in Aizu by instructions in Fukushima Prefecture (Part 1)
——About the Kyodoshi at Showa in the Fukushima Prefecture——

Maiko Goto　　Hisao Tabata

Our paper analyze the purpose to make the Kyodoshi and content of the main points from instructions in Fukusima. We investigated the state of conservation in Kyodoshi in Aize in Fukushima. As a result, it remains in Aize. Therefore, Kyodoshi is a data which suit to know the communities from the last term of Meiji period to the first term of Showa period. We tried to make clear the state of settlements in Oashi village and Nojiri village.

An environment have an effect the economy at Oashi village and Nojiri village. Oashi is higher above sea level than Nojiri and is lower an air temperature than Nojiri. As there are settlements in secluded place, Oashi was lack traffic facilities. So, Oashi did not have many crops. We think that forest products price in Oashi was lower than them in Nojiri, because Oashi was lack traffic facilites and was difficult to carry forest products.

1．はじめに

福島県大沼郡昭和村は「からむし織の里」[1]として全国的に有名である。平成3年にからむし生産技術保存協会が設立されて以来、全国から注目を浴びてきている（昭和村の明日を考える会編　2001：28－29）。

これまで、昭和村に関して昭和村の特産物であるからむし[2]の研究や道祖神[3]などの信仰面の研究がほそぼそと行われていたのにすぎなかった。また、それらがどのような環境の中で育まれてきたかという視点で研究をしたものはなかった。山口麻太郎は「民間伝承は先づ伝承単位体の生活現象としてとり上げられ、社会関係に於て経済関係に於て吟味せられねばならない」と主張した（山口　1949：18）。つまり、山口は民俗の個々の事例を単独で取り上げるのではなく、経済や社会関係などと関連して研究しなければならないと説いているのである。したがって、それを解明するには民俗誌の作成が必要である。だが、実際には小野重朗が述べるように専門的な知識を必要とする民俗の全分野を1人ないし2人で調べることは無理があるといえる（小野　1978：68）。昭和村の歴史を記した文献は『昭和村の歴史』だけであり、その中でも明治末期から大正時代の様子は詳しく記されてはいない。

そこで、本稿ではその問題を解決する１つの方法として、『郷土誌』の分析を試みる。この『郷土誌』はほぼ同時期に福島県全域で作成され、同じ項目の内容に沿って記されたものである。そのため、他地域のものと比較し易い資料であるといえる。さらに、『郷土誌』は小学校の校区単位に作成されているため、集落の様子を詳しく知ることが出来る。したがって、『郷土誌』を研究することは、同じ項目の内容を他地域のものと比較することができ、その当時の集落の様子を明らかにすることができるという利点も有している。

いろいろ存在する村落のうち特に昭和村を調査対象地域として選択した理由は、第１に村内の各小学校に『郷土誌』が保存されていたこと、第２にこれまで明治末期から大正時代の昭和村の様子について『郷土誌』を通しての研究が皆無であったこと、第３に昭和村には、会津地方の中心的な役割を担う町である金山町、田島町などに通じており、昭和村の『郷土誌』を研究することにより、金山町や田島町に代表される周辺地域の地域性の解明の手がかりになることなどが挙げられる。

本稿ではまず、『郷土誌』が作成された目的やその要項の内容を福島県訓令から分析する。ついで、福島県会津地方の『郷土誌』の保存状態を報告する。その中から、昭和村の『郷土誌』５冊を取り上げ、それらを通して明治末期から大正時代における大芦村と野尻村の状態の解明を試みる。また、①自然環境②人口と生業③経済と交通の観点から大芦村と野尻村を比較し、違いとその理由を明らかにしていきたい。

２．『郷土誌』について

本稿の研究対象である『郷土誌』とは、明治44年と昭和７年に福島県全域で、その郷土の歴史や地理、信仰、習俗などを記録するように訓令が出され、各小学校の教員達が中心になって作成したものである。

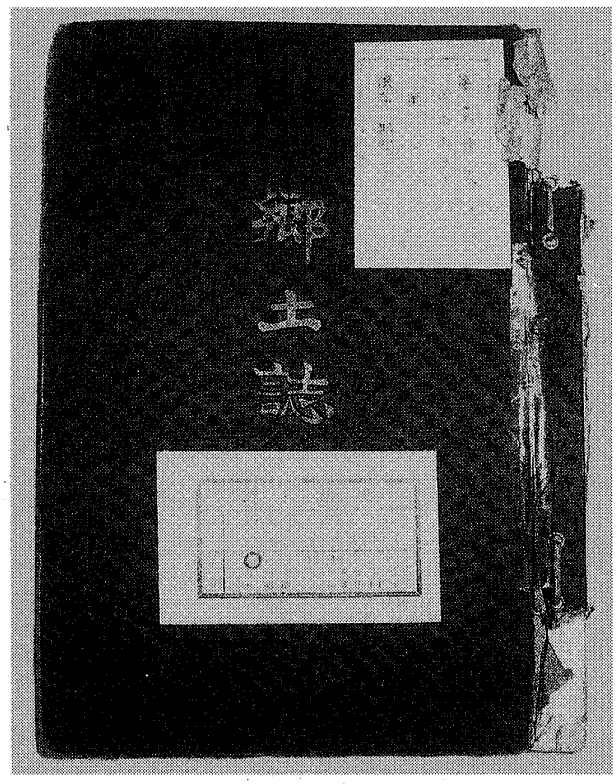

写真１　『郷土誌』

第１号の訓令は明治44年６月31日、当時の福島県知事西久保弘道によって出された[4]。第１号の訓令では、郷土の調査は国民教育及び地方経営上きわめて大切なことであるから、要項に沿って郷土誌を編纂し、各項目に必要な資料を集めるように、と記されている。

第２号の訓令は昭和７年１月14日、当時の福島県知事村井八郎によって出された[5]。村井は明治44年に制定した郷土誌の要項はその後の時代の推移により教育上の要求に適切でなくなったことを認めて、今回第２号の訓令を出したと述べている[6]。

第１章では歴史が中心である。郷土の地図や古来の歴史、維新後の沿革、市町村制実施後の沿革、それらを記した文献について記すよう指示されている。第２章では自然環境が中心とされている。平野や河川、山岳などの地形、また

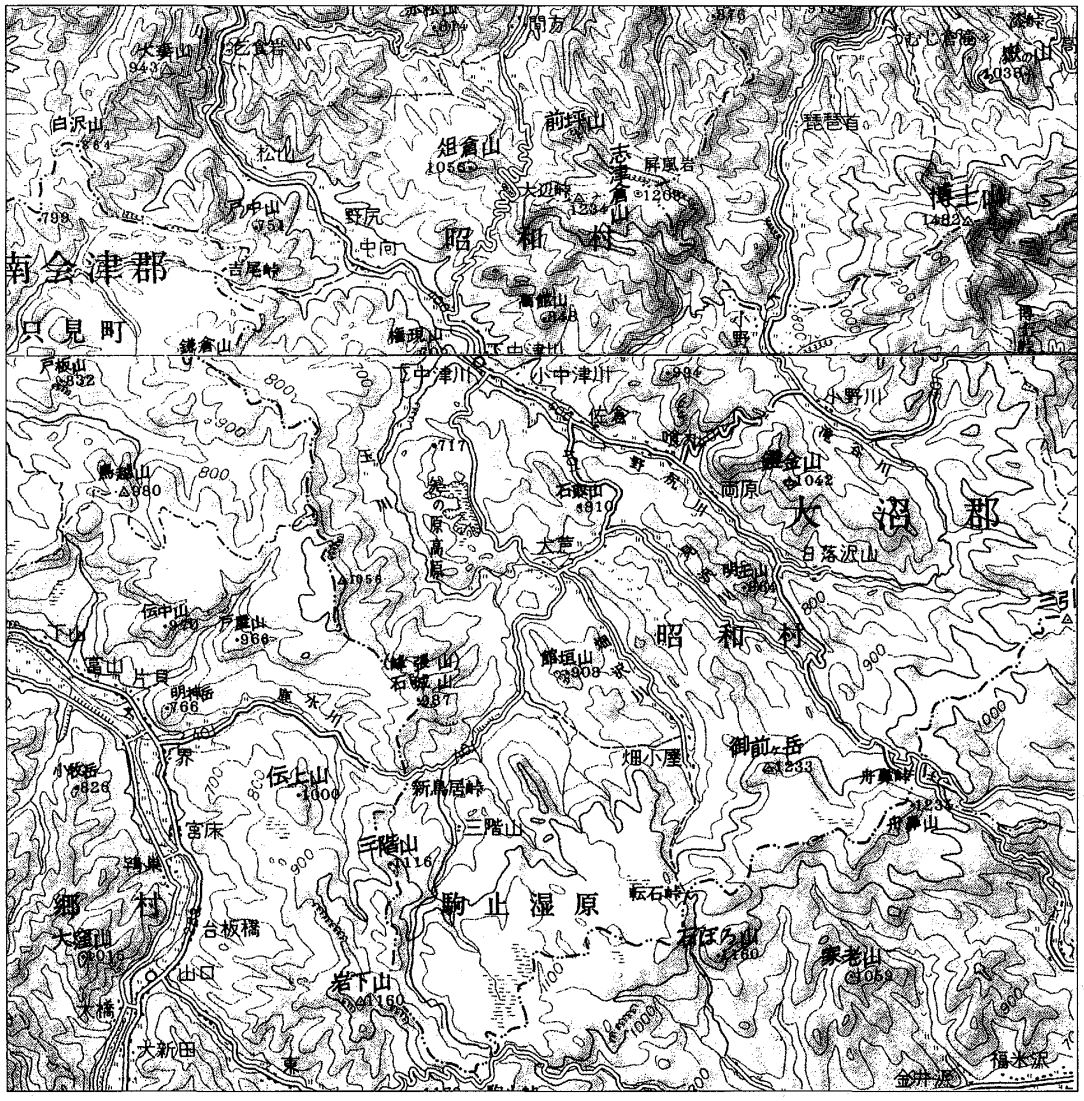

図１　昭和村の地勢図（20万分の１）「新潟、日光」

気温や雨量、動植物分布も要項の中に入っている。第３章では人口や戸数の変遷や教育、宗教、農業を中心とした生業について調査するようになっている。さらに税金や交通なども要項に付け加えられている。第４章では特殊事業として、開墾や電気事業、さらに風俗習慣などを取り上げるようにしている。第５章が、郷土を調査してきた上での考察に該当する。郷土の経済・社会的地位について分析、郷土の長所・短所を見出し、改善すべき点を考察するように記されている。

現在福島県会津地方には102校の小学校がある。平成17年に、アンケート調査を実施した結果、そのうち40校に『郷土誌』が残されていた。それをまとめたのが、表1である。１号、２号の両方の『郷土誌』が作成されている地域は少ない。特に２号では第５章が付け加えられた。しかしながら、会津地方に１号または２号、そして両方作成された『郷土誌』が会津全域に分布している点を考慮すると、明治末期から昭和前期にかけての集落の状況を同様の観点から比較できることが判明した。

表１　『郷土誌』所蔵先一覧

現小学校名	旧小学校名	作成年及び冊数
会津若松市		
永和小学校	永和小学校	１号２冊
門田小学校	門田小学校	１号１冊
荒舘小学校	荒井館ノ内尋常小学校	２号１冊
喜多方		
入田付小学校	入田付尋常小学校	１号１冊
岩月小学校	岩月尋常小学校	１号１冊
上三宮小学校	上三宮尋常小学校	１号２冊
熊倉小学校	熊倉小学校	１号１冊
		２号１冊
関柴小学校	関柴小学校	２号１冊
松山小学校	松山尋常小学校	１号３冊
会津高田町		
赤沢小学校	赤沢尋常小学校	１号１冊
		２号１冊
旭小学校	旭尋常小学校	１号１冊
藤川小学校	藤川小学校	２号１冊
金山町		
金山小学校	川口尋常小学校	１号２冊
		２号１冊
	沼沢尋常小学校	１号１冊
		２号１冊
	中川尋常小学校	１号１冊
会津本郷町		
第１小学校	本郷尋常小学校	２号１冊
三島町		
三島小学校	宮下尋常小学校	１号１冊
		２号１冊
昭和村		
昭和村小学校	大芦尋常小学校	１号２冊
	喰丸尋常小学校	１号１冊
	中津川尋常小学校	１号１冊
	野尻尋常小学校	１号１冊
新鶴村		
新鶴小学校	第１国民小学校	１号１冊
	第１小学校	２号１冊
	第２小学校	２号２冊
舘岩村		
舘岩小学校	舘岩尋常小学校	１号１冊

現小学校名	旧小学校名	作成年及び冊数
会津坂下町		
片門小学校	片門尋常小学校	１号１冊
		２号１冊
若宮小学校	五ノ併尋常小学校	１号１冊
	牛川尋常小学校	１号１冊
湯川村		
勝常小学校	勝常小学校	１号１冊
		２号１冊
猪苗代町		
吾妻小学校	吾妻尋常小学校	１号３冊
千里小学校	千里尋常小学校	１号１冊
		２号１冊
長瀬小学校	長瀬小学校	２号１冊
猪苗代小学校	猪苗代尋常小学校	１号１冊
西会津町		
新郷小学校	新郷尋常小学校	２号１冊
野沢小学校	野沢小学校	２号１冊
群岡小学校	群岡尋常小学校	１号１冊
磐梯町		
第１小学校	磐梯尋常小学校	２号１冊
第２小学校	大谷尋常小学校	１号１冊
		２号１冊
山都町		
第１小学校	本幡尋常小学校	１号１冊
		２号２冊
第２小学校	相川尋常小学校	１号１冊
第３小学校	一ノ木尋常小学校	２号１冊
南郷村		
第２小学校	富田小学校	１号１冊
高郷村		
第１小学校	高郷第１小学校	２号１冊
第２小学校	高郷第２小学校	２号１冊
第３小学校	高郷第３小学校	２号１冊
田島町		
田島小学校	田島尋常小学校	２号１冊
只見町		
只見小学校	只見尋常小学校	２号１冊
朝日小学校	朝日尋常小学校	１号１冊
		２号１冊

（注）１）１号とは第１号訓令後に作成された『郷土誌』のことである。
　　２）２号とは第２号訓令後に作成された『郷土誌』のことである。
〔出典〕アンケート調査及び現地での聞き取りにより作成

３．昭和村の地域的性格

昭和村は、福島県西部に位置し、只見川の支流野尻川と滝谷川、そして野尻川の支流玉川の３流域沿いに集落が存在する。会津線の会津田島駅から１日３往復する村営バスで、１時間の距離にある。だが、冬季はこの路線は不通となるため、昭和村に行く唯一の交通機関は、１日数本運行されるJR只見線会津川口駅から１日３往復する会津バスで50分かけて昭和村に入るルートしかない。総面積209.34㎢の約92％が森林で占められる（福島県昭和村編　2002）という山間部に位置する農村である。村内における最高海抜は博士山の1,482m、最低海抜は金山町の境の380mとその差は1,000m以上にも及ぶ。

昭和村は全国有数の豪雪地帯とされている。海抜高度400mの松山では積雪累計210㎝、海抜高度600mの大芦では積雪285㎝である[7]。初雪は11月中旬から、消雪は４月下旬から５月上旬と、積雪期間は５ヶ月以上にも及んでいる。冬季の平均気温[8]は喰丸で－2.1度、大芦で—3.5度となっており、かなりの寒冷地であることが窺える。

昭和村は中世において野尻に本拠地を持つ山内信濃の支配下にあり、天正18（1590）年までその支配は続いた。近世になると寛永20（1643）年、南山御蔵入領として昭和村は野尻組に編成された。明治22年には下中津川、野尻、松山、小中津川が野尻村、大芦、喰丸、両原、佐倉、小野川が大芦村となり、昭和２年になると野尻村と大芦村が合併し、現在の昭和村となった（平凡社地方資料センター編　1993：959－963）[9]。

昭和村の人口は昭和10年で3,855人、昭和30年4,810人、昭和50年2,902人、そして平成12年には1,874人と、昭和30年をピークに徐々に減少し、平成12年には半分以下まで減った。（福島県昭和村編　2002）。それは社会全体が第１次産業から第３次産業へ移行していくなか、農林業を基幹産業として発達してきた昭和村では、第３次産業に該当する職業がほとんど皆無であったことから、村外へ人口が流出していったと推測される[10]。

昭和村の基幹産業である農林業の産物推移は次の通りである[11]。田3,711,467㎡、畑30,299,346㎡である。水稲は昭和45年では作付面積266ha、収穫量1,170ｔであり、その後徐々に増加し、昭和52年には作付面積357ha、収穫量1,550ｔまで増加した。しかしながら、その年をピークに、徐々に減少の傾向にある。平成15年には作付面積184ha、収穫量964ｔとなった。陸稲は昭和45年作付面積12ha、収穫量22ｔであったのが、さらに減少していき、昭和56年以降は作られなくなった。水稲の他に大正時代では、麻、からむしを栽培していたが、戦後直後の食糧難のため、食糧生産優先になると麻、からむしの栽培は減少した。当時はカノ（焼畑）で蕎麦などをつくり食糧としていた。昭和28年にたばこの栽培が始まると、昭和50年代まで（昭和52年作付面積58ha、収穫量148ｔ）たばこ栽培は盛んであったが、それ以降は減少し、平成16年には作付面積２ha、収穫量４ｔにまで減少した。葉たばこ栽培が盛んな頃、同時にコンニャク栽培も普及し、昭和50年には、作付面積15ha、75ｔの収穫があった。しかしながら、昭和55年以降は作られなくなった。その後、加工トマト、ニラ、ジャガイモなどを栽培した。現在ではカスミ草の栽培に特に力を入れている。平成15年から16年にかけては、作付面積3,590ha、出荷量4,150,000本にまで達した。

山林は163,755,231㎡である。木炭の生産は県内唯一であった[12]。昭和42年には630,109kg、その後、年々減少し平成11年には4,000kgまで減った。それに対し、生しいたけやなめこなどの生産が増加し、平成11年には生しいたけで29,600kgもの生産量であった。

現在、昭和村はからむし織を中心として、観光事業にも力を入れている。平成6年にはからむし織の織姫[13]の1期生が来村し、平成13年にはからむし織について学べる施設である、からむし織の里が開設された（福島県昭和村編 2002：6－7）[14]。

4．昭和村に残されている『郷土誌』

福島県昭和村には、明治時代に4校の小学校が設立された。大芦村では、明治22年に喰丸小学校[15]と大芦小学校[16]（明治44年増築）が設立された。一方、野尻村では、明治29年に下中津川小学校[17]、明治34年に野尻小学校[18]が開校したが、昭和55年4校が統合し、昭和小学校となった。現在、昭和小学校に4校の『郷土誌』が所蔵されている。いずれも明治44年の訓令後に作成されたものであり、昭和7年に作成された『郷土誌』はない。しがって、今回は現存する、明治44年の訓令後に作成された『郷土誌』5冊を取り上げる。

1）明治末期から大正時代における大芦村

喰丸と大芦は同じ大芦村にあたり、それぞれの『郷土誌』に、同じような記述が見られるため、両資料を使用しながら、明治末期から大正時代の大芦村の様子を明らかにしていく。

①自然環境[19]

大芦村は玉川に大芦、野尻川に両原、喰丸、佐倉、滝谷川に小野川の各集落が存在する。これらの河川は灌漑に利用したほかは、「何レモ解雪ノ季ノミ木材ヲ搬流スルヲ得ルニ止マル」とあるように、冬季以外に、木材を運ぶ程度しかこれらの川は使用されなかったようである。大芦村の集落は「耕地タル平原アルモ挟少ニテ本村ハ殆ンド山岳重疊ノ間ニアリ」とあり、険しい山々に囲まれ、耕地になる平原もほとんどなかったようである。

大芦村の気候は、最も暑い時で摂氏[20] 32.7度、最も寒い時で摂氏－6.6度である。大芦村は、小野川で標高760m、両原で550mであることから、標高が高く、盛夏でもかなり涼しかったようである。降雪、積雪量の統計は記されていないが、「降雪ハ十一月下旬ヨリ積雪シ、翌年四月下旬解雪ス。平年ニ於ケル、積雪ハ五、六尺ニ達シ尚土地ニヨリ浅深遅速アリ。大字小野川、大芦ハ早降ニシテ又一尺乃至二、三尺深シ」と記されている。冬の気候は極寒である上、降雪、積雪量も多かった。

②人口と生業[21]

大芦村の人口は明治42年1,460人だったのが、徐々に増加し、大正13年には1,898人にまで達した。周囲が険しい山に囲まれているため、交通が不便であり、耕地が少ないことが、人口数にも影響を与えているようである。特に全村が農業を生業としていたため、耕地の少なさから、人口は急激に増加しなかったと述べている。

大芦村の人々は、農業を生業とし、大きな変化はなかったという。彼らは主に米、麻、からむしを作り、さらに副業として養蚕や林産もあったようである。大芦村の総戸数は、人口数とは異なって増加傾向は見られず、210～220戸数前後で一定していた。その9割以上が農業を生業としていたことが読み取れる。また、大芦村では「冬季間ハ能ク出稼スルモノ多ク或ハ木工、木地事業ニ従事スルモノ多シ」とあり、耕地が少ないうえ、積雪も多く寒冷な土地であるため、冬季に出稼ぎに出る者が多かった。大芦村の畑沢川流域（玉川の支流）では、木工や木地業のみを生業とする者がいたそうである。出稼ぎに行っても、前述したとおりの環境であるため、「生産額ノ一戸当、一人当ハ比較的僅少」であった。

大芦村の主な生産物の状況を把握するために、農産物と蚕と林産物の数量を取り上げる。まず、

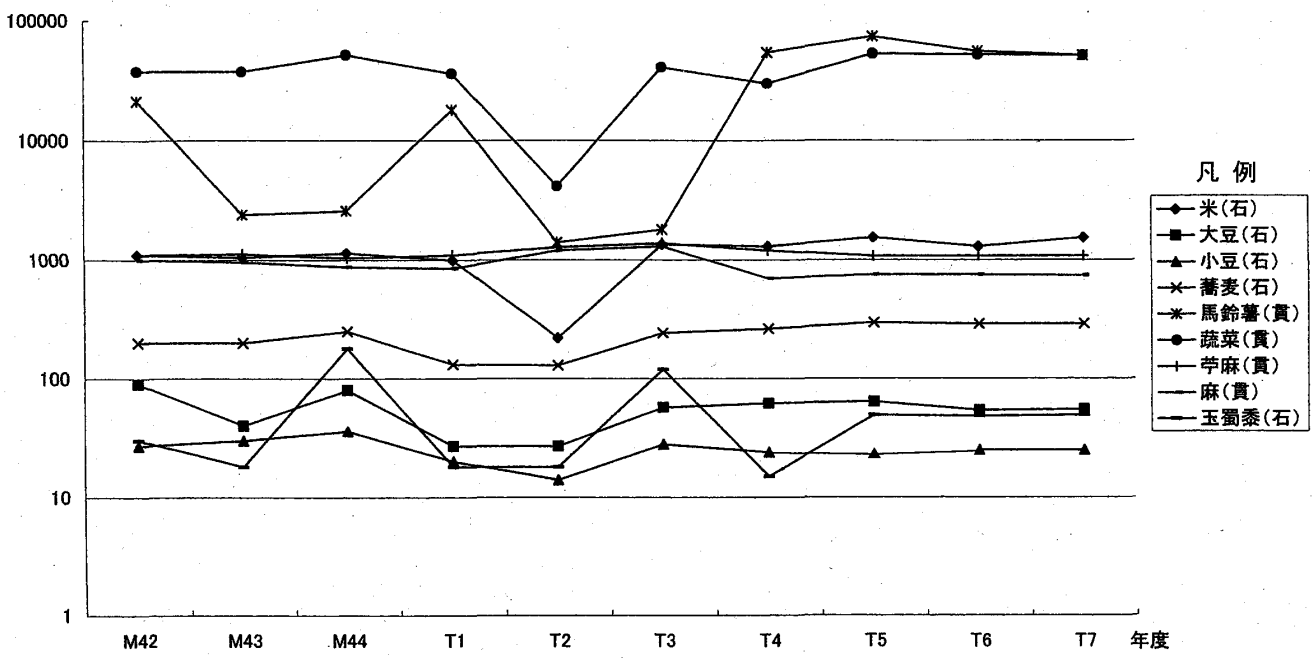

図２　農産物数量―大芦村―

〔出典〕喰丸小学校『郷土誌』より作成

表２　流出流入（明治44年度）―大芦村―

流出			流入		
種別	数量	金額	種別	数量	金額
麻	８７５貫	２,１００円	酒	３０石	１,５００円
苧麻	１,０４０貫	９,１５２円	烟草	２５０	１,０６５円
木羽板		２２６円	塩	１０６．５石	７５８円
下駄		５０円	石油	１６石	３２１円
麻織物	３８０反	６００円	砂糖	１０６貫	３２１円
木地	１,３４２巴	２,６８４円	醤油	１３石	２８３円
蚕	３２石	１,９２０円			
林産		４４０円			

（註）空欄は『郷土誌』に数値が記されていなかった。
〔出典〕喰丸小学校『郷土誌』より作成

農産物数量の統計は図２である。米は1,200～1,500石くらいである。馬鈴薯は明治20年に入って以来、徐々に生産が増加している。寒冷地である大芦村には適した作物であったため、この地域の作物として定着していったことがこの表から窺うことが出来る。からむしや麻はこの地域の特産物であったが、麻は大正２、３年をピークに減っていく。養蚕に関して『郷土誌』には、大正３、４年のからむし、麻の価格の大暴落により、それに代わって養蚕に力が入ったことが記されている。さらに、今後養蚕がこの地域の重要な産業になる可能性を示していた。このように、大正末期から養蚕は盛んになっていったようである。林産物類の価格は明治42年では2,444

表３　流出流入（大正２年度）―大芦村―

流出			流入		
種別	数量	金額	種別	数量	金額
麻		７３６円	石油	２６４石	６０７円
苧麻		１４,２８０円	砂糖	１３０貫	１４３円
下駄		６０円	烟草	２４０貫	１,８００円
木地		１６３円	酒	１５０石	８２５円
繭		１,４１３円	塩	７７０	５７７円
林産		２,９６１円	米	１８０石	３,２４０円
			肥料	１,８２０貫	３４７円

（註）空欄は『郷土誌』に数値が記されていなかった。
〔出典〕喰丸小学校『郷土誌』より作成

円であったが、大正７年には12,160円となった。特に大正４年から丸材及び角材や木炭の生産が多かった。

③経済と交通[22]

大芦村は①の自然環境で前述したように周囲が山に囲まれていることから、交通が不便であり、また気温が低く、多雪地帯で、農作物もあまりとれなかった。それが大芦村の経済にも大きな影響を与えていたのである。大芦村は90％以上が山地であり、森林資源は豊富であるが、当時の交通の不便さ[23]により運賃が高く、運送しにくかったため、林業[24]はあまり盛んでなかったようである。その流出入について記したのが表２（明治44年度）、表３（大正２年度）である。明治44年の流出では、１位がからむし、２位が木地、３位が麻である。しかし、大正２年になると、からむしの１位は変わらないが、麻、そして木地が減少し、林産物が増加してくる。林産物が増加しているのは、交通がしだいに便利になってきたからではないかと考えられるが、その点に関しては交通の状況や運賃などを視野に入れて検討していかなければならない。また『郷土誌』には「当区域ハ野尻概当区ノ兼務ナリシモ大正以来大字喰丸ニ森林主事ヲ駐在セシメ」とあり、大芦村に森林主事が駐在するようになるのもこの頃である。流入では大正２年度になると、明治44年度に比べて石油が増え、肥料が多く流入されるようになる。大正時代に肥料が多く流入されている原因は大正時代に農業改善が行われたからである推察される。この頃になると、新しい機械や肥料の使用が定着し、普及してくる。

明治末期から大正時代にかけて大芦村には主要道路が５つ開通していた[25]。喰丸野尻線以外の道路は車、馬が通ることができなく、険しい道であった。そのため、物を運ぶのも、容易ではなかった。このことが経済にも大きな影響を与えていたのである。

２）明治末から大正時代における野尻村

下中津川と野尻は同じ野尻村であり、両『郷土誌』には、同様のことが記述されているため、両資料を通して、明治末期から大正時代における野尻村の様子を見ていく。

①自然環境

野尻村は下中津川、小中津川、野尻、松山の４集落から成る。その集落はすべて野尻川沿いに存在している。野尻川は水深が浅いため、筏、

船も使用できず、早春雪解けの水を利用して、木材を流す程度にしか利用できなかったようである。

野尻村の気候は、最も暑い時で33.3度、寒い時で－2.2度である。降雪・積雪量の統計は記されていないが、「降雪ハ十一月中旬ヨリ降リ始メ五、六尺ニ達スルコトアリ」とある。「此季節ニシテ一夜ニ三四尺ヲ積ラセ三日モ四日モ降リツヅキ加フル暴風吹キ荒シ近村ヘノ往復ハ壮絶スルコト三四日ニ及フコト間々アリ」と冬は陸の孤島状態であり、近村に行くのにさえ困難であったことが窺える。

②人口と生業

野尻村の人口数調査は明治36年から始まったことが野尻村の『郷土誌』に記されている[26]が、統計があるのは明治40年からである。人口は2,000人ほどで、明治42年からほとんど変化はない。

野尻村の人々の生業は大部分が農業であり、その他に兼業として、副業も行っていたようである。副業とは養蚕業、林業、工業、商業などをいう。総戸数は280～300戸数ほどで、その９割以上が農業を生業としていた。一方、工業、商業に携わる人はほとんどいなかった。工業に関しては蚊帳の生産以外なかったようである。一方、商業を専業とするのは、１、２戸であり、他は兼業として、日用品を販売する程度であった。

野尻村の農産物数量を示したのが、図３である。米は1,400～1,600石ほどであり、その他多いのが、馬鈴薯や麻、からむしである。明治の段階では養蚕生産量はまだ30～40石あたりであるが、本文には「蚕業ニシテ毎年蚕業組合ヲ設置シ大ニ奨励シツツアルガ故ニ将来ハ大ニ発展ヲ見ルナランモ現今ハ未ダ幼稚ナルモノナリ」と記されている。野尻村では漁業も牧畜もあまり行われなかったようである。さらに、林業も盛んではなかった。林産物類の価格は明治42年では5,490円、明治43年では6,290円と少しあがっている。

③経済と交通

野尻小学校、下中津川小学校の『郷土誌』にも物資の流出・流入額について記載されていな

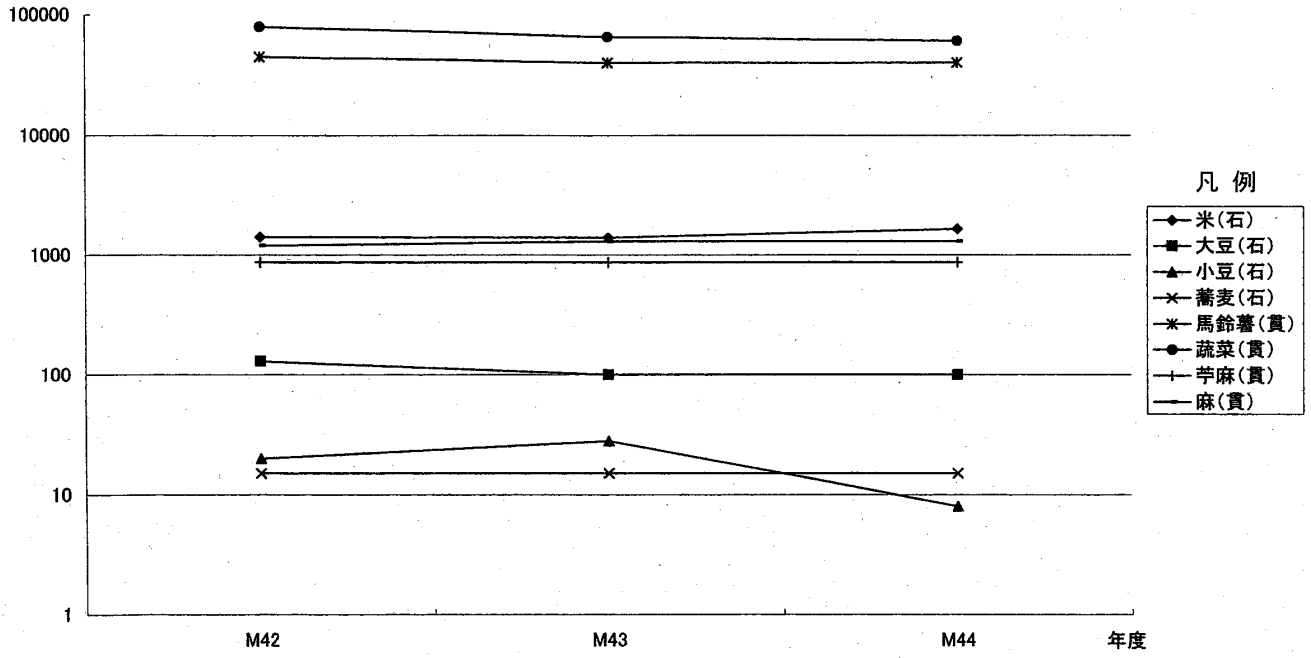

図３　農産物数量―野尻村―

〔出典〕下中津川小学校『郷土誌』より作成

い。しかしながら、野尻村では農産物や林産物が流出し、織物、飲食物、日用品類、魚類などを流入していたが、年々流入金額の方が上回っているのが、問題であることが書かれている。その取引先は主に若松や新潟であったという。

物を運ぶためには、道路が重要となってくる。明治末期から大正時代にかけて野尻村には主な道路が８つあった[27]。そのうち川口村へ出る道路が「本村唯一ノ便利ナル道路」であった。

３）大芦村と野尻村の比較

①自然環境

大芦村も野尻村もまわりを山で囲まれているが、大芦村は野尻村と比べて標高が高く、夏は１度位差であるが、冬は４度も大芦の方が低い。

さらに、積雪量も野尻村より30cmから90cmも多い。集落の位置に関しては、大芦村は玉川、滝谷川、野尻川の３流域に存在するのに対し、野尻村の集落は野尻川のみに存在する。昭和村には３つの川が流れていたが、水深が浅いため、木材を搬流することができなかった。また、周囲が山で囲まれているため、交通も不便で、このことが、昭和村の経済に大きな影響を与えていたとされる。

②人口と生業

大芦村の人口は徐々に増加したのに対して、野尻村では人口の増減はあまり見られなかった。

生業は両方とも農業が最も多く、大芦村では工業に携わる人が少数存在したくらいである。大芦村と野尻村の農産物を比較すると生産高は野尻村の方が高い。しかし、からむしに関しては大芦村の方が高い。麻は明治末期においては多く生産されたが、徐々に生産高が低くなっていっている。養蚕に関して、明治時代はまだ技術的にうまくいかなかったせいか、生産高は低い。だが、大正時代になると徐々に増加していく。

林産物の価格は大芦より野尻村のほうが高い。山林の面積は大芦村の方が多いが、前述したように、大芦村は野尻村よりもさらに奥に位置しているため、搬送するのが困難である。そのため、野尻村の林産物価格の方が大芦村のそれよりも高くなっているのである。

③経済と交通

両村の流出、流入先は会津若松、新潟方面であった。野尻村の流出流入の種別と金額は記されていないため、大芦村のものを見ると、流出品目は麻が減少していくのが、特徴である。流入品目では、大正時代になると、石油や肥料が多く、農業改善が実際に行われていたことがこの流入品目から知ることができる。交通を見ていくと、両村とも山で囲まれているため、馬車が通れない道が多かった。しかしながら、その中で唯一馬車も通れる道が野尻村を通って川口にでる道である。これは現在の国道400号線に該当する。現在も、冬季に昭和村へ行く道路はこの道路しかない。大芦村からは野尻村を通ってその道に出なければならなかったことから、大芦村は野尻村に比べて交通上不便であった。

それが、前述した林業のあり様に係わってくるのではないかと考えられる。

５．おわりに

本稿では『郷土誌』を対象として研究を進めてきた。『郷土誌』は明治44年、昭和７年の訓令後に作成された。その内容は自然環境から生業、風俗習慣に至るまで多岐にわたって詳細に記されている。さらに『郷土誌』は会津地方全域に残されていることから、明治末期から大正時代にかけての集落の状況を把握するのに適した資料であることが判明した。

その『郷土誌』の中で、昭和村を取り上げ、大芦村と野尻村の明治末期から大正時代の様子を、①自然環境②人口と生業③経済と交通の点

から分析してきた。その結果、大芦村と野尻村の自然環境が経済に大きな影響を与えていることが判明した。大芦村は野尻村に比べて、標高が高く、気温も低い。その上、奥まったところに集落が存在するため、交通が不便であった。そのため、農産物の収穫も低かった。さらに、運搬の点から考えても交通の不便さから野尻村よりも豊富な山林資源をうまく利用することができず、林産物の価格も野尻村より低かったのではないかと考えられる。また、大芦村の生産物の表から、麻や木地生産が減少する一方で、林産や、養蚕が盛んになってくることを知ることが出来た。その後、昭和村は農林業を基幹産業として発達していく。水稲の他、たばこ、コンニャク、加工トマトなどを栽培し、現在ではカスミ草の栽培にも力を入れている。木炭は県内唯一の生産となった。以上のように、明治末期から大正時代にかけては『郷土誌』を通して、それ以後は聞き取りや統計資料を用いて、昭和村の生業の変遷を辿ることが出来るのである。

今後の課題として他町村の『郷土誌』の分析を行い、昭和村の『郷土誌』と比較していくことがあげられる。各『郷土誌』を分析した上で、明治末期から、現在までの変遷を明らかにしていきたい。そして、著者は現在雪室や年中行事の聞き取り調査も進めているが、それらは集落によって違いが見られる。雪室[28]や年中行事は生業に係わってくることが多いため、『郷土誌』の分析結果を利用しながら、調査を進め、相違点をもたらす要因を明らかにしていきたい。

註

1）からむしはイラクサ科の多年草である。茎の皮から繊維を採り、糸を製して布を織る。平成13年、昭和村佐倉に「からむし織の里」がオープンした。工芸博物館ではからむしの歴史を学ぶことができ、織姫交流館ではからむし織りを体験できる。（福島県昭和村編　2002：6－7）

2）からむし生産に関する研究（昭和村生活文化研究会編　1990）が行われており、さらにからむし関係の資料集も出版されている。（昭和村教育委員会編　1999）

3）昭和村の道祖神については馬場勇伍が中心になって研究を進めてきた。（馬場勇伍　1992）

4）『郷土誌』の目次は次のとおりである。第１章沿革、第２章地勢、第３章気象、第４章生物、第５章戸口、第６章官公署、第７章学事、第８章社寺及宗教、第９章兵事、第10章衛生、第11章警察、第12章風俗習慣、第13章経済、第14章生業、第15章交通、第16章口碑伝説、名勝旧跡。

5）第２号訓令後の『郷土誌』は次のように構成されている。第１章郷土ノ沿革、第２章郷土ノ自然地理、第３章郷土ノ人文地理、第４章郷土ノ特殊ナル方面ノ調査、第５章郷土ノ総括的調査、第６章付録。

6）郷土の調査を行い、記録する場合に注意すべきことが次の通り記載されている。

一、調査要項ノ体系ヲ正シテ組織的ナラシメタルコト

一、動的方面ノ考察的調査ヲ重視シタルコト

一、総括的調査ヲ加ヘ郷土ノ特質ヲ明カナラシムルニ努メタルコト

7）積雪累計は昭和村役場所蔵の気象観測集計表（降雪状況）をもとに算出した。本稿では、松山、大芦の両集落の統計が記されている昭和60年の数値をとった。

8）喰丸、大芦における冬季の平均気温は役場に所蔵されている気象観測集計表（気温）をもとに算出した。本稿の数値はそれぞれ昭和44年から52年の１月から３月の平均気温である。

9）第２次世界大戦後、奈良布や玉川などで開拓が行われたが、特に玉川ではうまくいかず、廃村となってしまった。

10）昭和村の統計は昭和40年代からしか残されていない。それ以前の生業を把握するには、聞き取り調査と本稿の研究対象である『郷土誌』に頼らなくてはいけない。その意味でも『郷土誌』は資料的に価値がある。

11）農産物の推移に関しては、馬場勇伍氏、菊地宗栄氏、羽染正雄氏、山内善次氏、佐藤庄市氏、

栗城栄光氏などの聞き取りによりまとめた。それを裏付ける資料として『福島県農林水産統計年報』の昭和45年から平成16年までの統計を引用した。

12）現地での聞き取り調査によると、各集落に2、3軒の炭焼を専門にする家があったという。

13）織姫とは全国から応募してきた女性のうち、選ばれた人が1年間昭和村に在住して、からむし織の体験をする人をいう。

14）からむし織の里の施設開設や織姫の制度は、昭和村のからむし織の技術を伝承するという目的で行われてきた。

15）喰丸小学校には1冊の『郷土誌』が残されており、大正14年11月に小沼庄佐校長によって編纂された。

16）大芦小学校の『郷土誌』は2冊で、年代は記されていないが、最初に明治44年に出された訓令が記されているため、明治44年から、次の訓令が出された昭和7年の間に作成されたものであると推測される。

17）下中津川小学校では1冊の『郷土誌』が作成されており、大正2年6月に長嶺主税によって編纂された。訓令が出された明治44年から調査を始め、大正2年に作成された。

18）野尻小学校の『郷土誌』は1冊作成されており、年代は記されていないが、目次を見ると明治44年に出された要項と同じことから、明治44年の訓令後に作成された『郷土誌』であると考えられる。

19）自然環境については第2章地勢、第3章気象から分析した。

20）本文は華氏であったが分かりにくいため、摂氏に直した。

21）人口と生業別戸数に関しては、喰丸小学校作成した。『郷土誌』の第5章戸口、第14章の生業から分析した。

22）経済に関しては第13章、交通は第15章から分析した。

23）昭和村の物質流通経路は「物貨ハ高田永井野方面ヨリ博士峠ヲ通シテ移出ス。」と記されている。

24）昭和村の林業の状態は「雑木ノ如キハ運搬不便ノタメ放置シアル」と書かれている。

25）喰丸野澤線、大宮若松線、大芦坂下線、大芦桧澤線、大芦佐倉線の5つである。

26）野尻村の人口は年々増加の傾向にあったが、37、8年の日露戦争による男子の出征と、凶作による出稼者が多く出たことから、一時人口が減少したと記されている。

27）博士街道、美女街道、布澤街道、下入街道、鳥居峠、矢ノ原道、田ノ口道、柳ガ澤道の8つの道路である。

28）雪室とは、雪で作った建物をいう。雪室には、雪穴や鳥追い小屋、カマクラなど種々の名称がある。

引用文献

小野重朗（1978）：「地域研究」『総論　講座　日本の民俗1』有精堂、62－80頁

昭和村史編集員会編（1973）：『昭和村の歴史』

昭和村教育委員会編（1999）：『カラムシ資料集その1』

昭和村生活文化研究会編（1990）：『福島県昭和村におけるからむし生産の記録と研究』

昭和村の明日を考える会、昭和村教育委員会編（2001）：『昭和村あんじゃこんじゃ』

馬場勇伍（1992）：『昭和村の石造遺産』昭和村役場企画課

福島県大沼郡昭和村立昭和小学校（2004）：『昭和小学校要覧』

福島県昭和村編（2002）：『村勢要覧』

福島農林統計協会編（1970－2004）『福島県農林水産統計年報』

平凡社地方資料センター編（1993）：『福島県の地名』平凡社

山口麻太郎（1949）：「民間伝承の地域性について」『民間伝承』13－10、15－19頁

付記

『郷土誌』の所在については会津坂下町古川利意氏からご教示をいただいた。また資料収集にあたり、多くの方々にお世話になりました。厚く御礼申しあげます。

昭和村役場（佐々木和義氏）昭和村教育委員

会（小林彌吉氏）、昭和村すみれ荘（佐藤孝雄氏）、昭和村立昭和小学校（本名幸平校長先生）五十嵐一喜氏、五十嵐初喜氏、菊地宗栄氏、栗城栄光氏、佐藤庄市氏、羽染正雄氏、馬場勇伍氏、山内善次氏、渡辺クマヨ氏

なお本稿は、後藤・田畑の共同調査の成果をまとめたものである。それ故、本文に関しても下書きを後藤が行い、補正および加筆し、統一を田畑が行ったため、各章とも両名の共同執筆とし、両名が全般にわたって共同して責任を負うこととした。

（ごとう まいこ　生活機構学専攻２年）
（たばた ひさお　生活機構学専攻 教授）

受理年月日　平成17年９月30日
審査終了日　平成17年12月１日